



# リレートーク #175



## 東日本大震災追悼シンポジウム に参加して

### 片野坂 真哉

全日本空輸  
専務取締役執行役員

今年の3月11日、私は東京駅発の東北新幹線やまびこに乗って仙台に向かった。「全国経済同友会 東日本大震災追悼シンポジウム」に参加するためである。車窓から、残雪の男体山、那須岳、安達太良山、蔵王連山の山並みを眺めながら、胸に去来したのは、1年前、営業開始前に「はやぶさ」の試乗会に招待していただき、流れるような山並みと国内最速320キロを味わったことである。それからわずか数日の後、未曾有の大震災が東日本を襲ったわけである。

東北新幹線のみならず、あらゆる鉄道網、高速道路、生活道路が寸断された。その中で新幹線は、海岸に設置されたセンサーが機能して、すべての車両が緊急停止できたと伺った。JR東日本の安全に対する対策は素晴らしいものであると感動した。航空網も例外ではなく、ANAの定期便などが地震の数分前に仙台空港を離陸できたのは幸運であった。押し寄せる津波が滑走路をすべて覆い尽くし、避難された多くの方々と共に、陸の孤島と化した空港ターミナルの姿が今もわれわれの眼に焼きついている。

シンポジウムは、ノーベル平和賞受賞者、ムハマド・ユヌス氏の講演のほか、「原子力災害からの復興」「わが国経済の再生」といった重要なテーマのパネル・ディスカッションで、各界の専門家の話を伺えた。特に東北地方の住居、道路、田畑、森林などに広範に飛散、蓄積した放射性セシウムの除染と廃棄物の処理について、東京大学 児玉龍彦教授の「日本の科学技術と経済力を結集すれば、除染と地域の復興は必ず成し遂げることができる」という話には、目を開かれる思いであった。14時46分。長谷川代表幹事ほか、参加者一同で黙とうをささげることができた。

すでに震災直後から、復興へのさまざまな取り組みを続けてきたが、東北への国内、海外からの観光需要の復活に向けて、官民一体となって取り組んだ「東北観光博」が始まった。統一テーマは、「ところをむすび、出会いをつくる」。航空路と鉄道網も互いに「つなぎあう」ことで、人々の出会いのお役に立ちたいと気持ちを新たにしている。

注) 児玉龍彦氏：東京大学先端科学技術研究センター 教授／東京大学アイソトープ総合センター長 医学博士